

私教連夏のついで

本間藤四郎

一九九〇年ごろからはじまる生徒急激は、私立高校を衰滅させるものとなるであろう。そういうところが方から私教連は、昨年あたりから「急減期政策」の策定に着手しはじめました。その上に覆いかぶさるようになってきたのが軍拡臨調路線による「私学助成10%削減」という攻撃です。

第二回将来構想研究会は伝統ある私教連夏のついでこの場をかりて、八月一日、一九日の二日間、妙高高原香雲閣でひらかれました。ここには九つの学園・単組から代表六八名が参加し、危機打開によせる思いの切実さをしました。

第一回目の約束ごととなっていた各校の将来構想案をもちよるといことが実行され、これをよみ合って互いに学ぶところがあつたのは収穫です。

しかし、どんな理想的な学校像も目前の生徒のことから出発するはかはないことから、「生徒のとらえなおし」論議がすすめられたのは当然でした。討議では小中学校と少しもちがわぬ荒廃しきつた生徒の実態があらさまにされるとともに、それへの対応に追われて疲れては、指導が通じないといらだつたり、教師をやめたいと思いつめていく教師の実情もだされました。ではどうするかということが肝心ですが「生徒を見る目を変える——発想の転換」ということで様々な意見がだされはしたものの、子どもも否定的な現象の中に肯定的・積極的なものへの転換の契機をつかむ「眼」の問題、そうした発展的な転換を可能にしていく教師としての働きかけの「わざ」の問題をふくめて、ああこれだいいと安心できるところまで論議はいきつくことができずに終わりました。教師の力量の問題、そしてその力量を高めしていく方法としての運動論、組織論の重要さが、ひ

しひしと感じられました。

このこともふかくかわって、私は各校の組合のいわばつくりなおしをよびかけるような組織問題についての基調報告をのべ、愛知県同朋高校教職組から招いた酒井浩朗委員長からは、「総対話、総評価運動」についての講演をしていただきました。生徒の状況の悪化にへこたれることなく私学教育創造のたくましい歩みをすすめていくためには、仲間の良いところを素晴らしいところはすべて引張りだして教師集団全体の財産にしておくはならぬ。そういうことができる組合にしていくながら幹部の自己変革にあると提起して討議に入りましたが、これも議論はのぞましい水準にまで達したとはいえませんでした。

ひとつには、何といっても「急減期」、つまり生徒がとれないため学校がダメになるということがありえない段階に入っているという安堵感があります。

それと、総評価ということもふくむ真の教師集団づくりという課題は、(法則が普遍的であるということとはたしかであるとしても)、具体的な推進となると個別職場のドロドロとした現実に足をふみこまなくてほだめの問題なのです。そうした意味では、思いきった問題提起によって問題の所在に目がむきはじめたことと、私教連中執みずから各職場に入つて、真の意味で強い単組をつくる運動の先頭にたつて決意を披れきしたことに意義があつたと思います。

この研究会では、また、昨年度の二九一名(二・六%)にもぼつた退学者の統計と原因分析、そして退学者問題にとりくむべきの視点と課題を提起した私教連教研部の論文の学習もおこなわれ、これを職場でさらに深めるとの約束をして散会しました。

真の討議づくりはそのまま激しい斗いですが、暑い夏を送って私教連はいま五〇万署名をめざす「83公費助成秋の大運動会」に突入しました。いま、各職場では私教連がよびかけた「三時間討議」がすすめられ

ています。(新潟私教連書記長)

第二九回新潟県母親大会から

長井 洋子

全国的にも数少ない統一した母親大会が、今年も九月十一日(日)新潟小学校で開かれました。

県内各地から約八〇〇名のお母さん達が参加し、熱心に話しあいがありました。

午前中は、「子供と教育」「くらしと老後」「平和」と、三つの柱、十四の分科会に分かれて、話しあいました。

中学校の問題の分科会では、教室があふれ、廊下にもまで、参加者がはみでるほどの盛況ぶりです。二時間半の短かい時間、みっちり話しあいがされました。又、今戦争の危機がいわれている時、平和について、母親の関心はつよく、平和、今、私たちは何をしなければならぬか、ここまできては戦争の危機、の二つの平和の分科会は、いずれも教室あふれんばかりの参加でした。

午後からは、森田俊男先生(国民教育研究所長)による、平和、教育と母親の生き方、のテーマで講演がありました。

先生のお話の中心点は、「今、母親をとりまく情勢は大変になってきている。日本を不沈空母に、又世界中の人を皆殺しに出来る核兵器がつくられていく。教科書の書きなおしや、落ちこぼれの子がたくさん出てきていく。政府や文部省は、今ほど、戦後の教育をみなおす時とばかり、教育大改革の準備をすすめている。

子どもたちの作文にもみられるように、二〇年後の将来、自分に希望がもてないという子がふえてき